御挨拶

中村歌右衛門

皆様、本日はお暑い中をご来場下されまして誠に有難うございます。

「葉月会」も今年は第十三回を開催いたす事になりました。中堅、若手俳優の技芸発表の場であり、歌舞伎邦楽若手の勉強発表の場としても年々盛んになって参りましてこんな嬉しい事はございません。是もひとえに、皆様方の温かいご支援のお蔭様と厚く御礼申し上げます。

本年も珍しい発表となりました。河竹黙阿弥原作の「御伽草紙百物語」に依拠しまして葉月会台本とし、ご繁用中にもかかわりませず、今回も河竹登志夫先生が監修について下されましたことは、多くの諸先輩のご指導と併せて出演者一同いかばかり励みになりましたことか一同に代わりまして厚く御礼を申し上げる次第でございます。

また邦楽と舞踊の勉強は「今様傾城道成寺」をご覧頂きます。

本年も藤間勘十郎師にはひき続き振付をたまわり、暑中にもかかわりませぬお稽古をつけて下されましたことは、一同の身にあまるご鞭撻でございまして、この場ではございますが心より厚く御礼を申し上げる次第でございます。

このように身にあまるご指導を頂戴して稽古を続けております修業中の者ばかりでございます。一同の稽古熱心にめんじて、どうぞ年に一度の舞台を見てやって下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

なお、毎夏の開催にあたり惜しみなくお力添え下さいまする指導の諸先輩をはじめ、関係者各位、特に国立劇場の皆様には心より感謝申し上げたく、この機会に厚く御礼申し上げます。

平成六年八月

（伝統歌舞伎保存会会長）

第十三回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優
歌舞伎邦楽若手研修発表会

一 今様傾城道成寺

藤間勘十郎＝振付

長唄囃子連中

河竹黙阿弥＝原作による葉月会台本
河竹登志夫＝監修

二 御伽草紙百物語

持田諒＝演出

四幕六場

妲妃のお百

序幕　高輪大木戸の場　加賀屋歌江
二幕目　武蔵屋角口の場　澤村藤車　二村幸雅
同　座敷の場　尾上梅之丞　松榮忠志
三幕目　砂村横堀殺の場　中村紫若　土肥洋史
四幕目　総禅寺書院の場　中村歌松　田島春男
大詰　同　庭内の場　中村梅二郎　大西忍
中村小松　谷亮一郎（第十二期歌舞伎俳優研修生）
中村吉弥
澤村光紀　○
中村梅蔵　白岩亮
中村吉次
澤村大蔵　○
中村駒助　長唄連中
山崎権一　鳴物連中
中村又蔵　竹本連中
松本幸右衛門

（竹本連中＝出演）

平成六年八月十七日（水）十二時 開演　五時 開演

主催　社団法人伝統歌舞伎保存会
後援　日本芸術文化振興会

藤間勘十郎＝振付

今様傾城道成寺

長唄囃子連中

傾城葛城　加賀屋　歌江
新造九重　尾上　梅之丞
安珍　中村　紫若
新造　中村　梅蔵
新造　中村　歌松

解説

初演は、享保十六年三月、江戸中村座で初代瀬川菊之丞が葛城という役名で「傾情福引名護屋」の第二幕として演じました。別名題「無間の鐘道成寺」または「中山道成寺」とも言われて今日にいたりました。

道成寺所作事として、江戸ではじめて上演された作品としても有名です。

初演は、唄・坂田兵四郎、三味線・杵屋嬉三郎でした。

＊　＊　＊

今回、勉強会としましては、たいへん重い「道成寺物」の企画に際しまして新たに藤間勘十郎師が振付して下さいました。新たにと申しますのは、実は今回葛城を勤める歌江は、昭和五十年の国立劇場小劇場で、一度この葛城を勤める機会に恵まれており、今度二回目の出演になります。このような舞台はほんとうに恵まれた機会であり、それに応えるべく歌江の稽古もなみなみならぬものとなりました。どうぞご期待下さい。

新造の梅之丞、安珍の紫若は研修修了生第二期の仲良しコンビで、この共演も楽しい舞台です。後輩の梅蔵・歌松もお目見得いたします。

どうぞごゆるりとご鑑賞下さい。

河竹黙阿弥＝原作による葉月会台本
河竹登志夫＝監修

御伽草紙百物語（おとぎぞうしひゃくものがたり）　四幕六場

持田諒＝演出

「妲妃のお百」

序幕　高輪大木戸の場
二幕目　武蔵屋角口の場
同　座敷の場
三幕目　砂村横堀殺の場
四幕目　総禅寺書院の場
（竹本連中＝出演）
同　庭内の場

浄瑠璃　竹本葵太夫
三味線　鶴澤泰二郎
作曲　竹本葵太夫

序幕　高輪大木戸の場

妲妃のお百　歌江
桑名屋徳兵衛　権一
美濃屋重兵衛　又蔵

お百は、魚屋の兄新助とたった二人で暮らしていた平凡な女の子であった。

そんな時、お出入りの桑名屋徳兵衛のお内儀から下働きの女の子を探していると聞かされて、父親がわりの新助は妹の行儀見習いにはもってこいだとお百を上がらせた。桑名屋といえば大阪で聞こえた廻船問屋の老舗である。お内儀のお高もいい人だし、新助は早速桑名屋へお百を連れて挨拶をした。お高もひと目みて可愛い少女のお百を気に入った。

ところが年月の経るうちに大人になったお百は、見るも妖艶な美貌の女に成長していった。あろうことかそれまで円満であった徳兵衛は、いつしかお百に身も心も奪われていた。

兄の新助が驚き呆れたのは、打って変わった妹お百の邪険な心であった。お百はやがて徳兵衛をそそのかし、店の手代とお内儀さんが間男しているとあらぬ罪をきせた上、土蔵の中に閉じ込めて、きくも無残な折檻を続け、揚げ句の果てに雪の夜、着のみ着のままでお高を桑名屋から追い出してしまった。この時、お高は徳兵衛との一粒種を宿していたのであった。

しかし、その二年後に、全く火の気のない土蔵から火の玉がとぶや、みるみる土蔵を焼き払い、やがて母屋に火が移り桑名屋は灰塵に帰した。すべてを失った徳兵衛とお百は、大阪での信用も失墜し、やむなく新天地の江戸で立ち直るべく東下していった。↘

二幕目　武蔵屋角口の場
同　座敷の場

姐妃のお百　歌江
桑名屋徳兵衛　権一
中川右膳　幸右衛門
魚屋新助　大蔵
箱屋小助　吉次
諸士林蔵　光紀
同郷蔵　吉弥
若党　二村幸雅
若党　上肥洋史
中間　田島春男
中間　松榮忠志
仲居　大西忍
仲居　谷亮一郎

↙辿り着いた江戸は、高輪の大木戸であった。右も左もわからないお百と徳兵衛は、寝静まった深夜にたった二人っきりであった。捨てる神あれば拾う神あり、そこへ通りかかったのが美濃屋重兵衛であった。

江戸の風をきり、身なりのいなせな重兵衛。お百の心が動かないわけはなかった。

その一瞬、さっと風が動くや闇の奥から怪しき坊主がぬっくと立ち上がった。

「あれえっー」と悲鳴をあげて思わずしがみつくお百。しっかりと抱き留めた重兵衛。

闇の雲はいつしか晴れて一条の月の光に照らし出された二人。あわてて身をひくお百をいつまでも見とれている重兵衛。手を引く徳兵衛。月はまた雲の中へ――。

＊

ここは洲崎の料亭武蔵屋。粋にしつらえた供まちで一杯やっている客で賑やかだ。

そこへ現れた徳兵衛はといえば、見るからに落ちぶれたやつしなり、どうみても是は紙屑買いだ。一体、どうしたというのだろう。徳兵衛は、あの夜に出会った重兵衛に拾われて厄介になったものの、いつまでも居候をきめこむわけにもいかず、昔の貸付先の金を催促に甲州へ出掛けたが、途中で病気になって帰れなくなった。その間に、お百はお百で、身の振り方を思案し、小三と名乗って芸者に出た。徳兵衛は帰らず、留守居は重兵衛と二人きり、そうなると先は見えていた。お百は徳兵衛を見捨てて重兵衛と行方をくらました。

ついに徳兵衛は、手に技もなく紙屑買いにまで成り下がったが忘れられないのはお百の行方、この日も町で見かけた女こそお百に違いないと洲崎まで追っかけてきたところだった。ところが、ここでばったり出会ったのは、魚売りの新助だった。

面目ないと言って悔やむ徳兵衛を新助が励ました。あの雪の夜、丁度お高に出会ったからいいものの、一命をとりとめたお高は男子を出産した後亡くなった。子供は無事に大きくなりましたよ、と聞かされて徳兵衛はただ涙するばかり、再会を約して去った新助の後を涙で見送る徳兵衛は、一層お百への憎しみが増し、たしかにこの武蔵屋へ入った芸者こそお百に違いない、と徳兵衛は中庭へ忍び込んだ。

座敷では千葉家の家老職中川右膳とその配下の宴がたけなわであった。酔いがまわる程に右膳はいっとき横になった。そのすきに中庭へ忍び込んでいた徳兵衛が躍り出た。

びっくりしたのは小三のお百だ。どうしてここがわかったのだろう、といぶかしがる気持ちは隠して、いつもの通り色気でなだめすかしては徳兵衛を丸め込むお百の手管。うまくしおわせて箱屋の小助に家へ連れていって貰い、待っていておくれよ、と言うのを忘れないお百。なにげないその心底には、厄介者の徳兵衛にこれ以上まとわり付かれるのは、もう真っ平、という堅い決意が潜んでいた。お百は、新しい日星をつかんでいた。

むっくり起き上がった中川右膳は、やがてお百に心底の悪を明かした。千葉家乗っ取りの野心を明かす以上、お百を女と見込ん↘

三幕目　砂村横堀殺の場

姐妃のお百　歌江
桑名屋徳兵衛　権一
雇い婆お熊　紫若
堅田金五郎　梅蔵
美濃屋重兵衛　又蔵

↙でのことだ、と言われてふたたび生き血の騒ぐお百だった――。この機会をのがしてはもうよい日はそうは望めない。それなのになぜ好機に徳兵衛は現れたのか。あの愚図が居る限り、あたしのよい目は出ないだろう、とお百はひそかに徳兵衛を殺してしまおうと決心した。

＊

砂村の汐入りの土手を辿っていく二つの影。再び一緒になった徳兵衛・お百の二人だ。

ようやく江戸へたどり着いた夜のように、真っ暗な闇に包まれた二人だが、不思議に徳兵衛は幸せだった。やっと見つけたお百は思いの外に親切で情が深い。これは徳兵衛が、思っても見ないことだった。なんだかだと言いながらお百は結局己なしでは生きていかれないのだ。その証拠に、しつっこい右膳という侍から逃れるためには、己と一緒に逃げようという。回り道はしたけれど、これでようやくお百とまた二人旅だ――と、心に笑みがこぼれた瞬間、身体のなかへど熱い火箸が走った。徳兵衛はどっとくづれ落ちた。

聞こえてきたお百のあの声。「おい、徳兵衛さん、お前がいくら怒鳴っても、人里離れた十万坪、聞き手はわたしとおっかあと石の地蔵と三人きり――」

しだいに遠くなっていく意識のすみで、徳兵衛はようやく自分の一生を見た。

大阪一の廻船問屋の商家に生まれ、父徳蔵に猫のように可愛がられ、何不自由なく育てられたのが世間知らず、慾ばって大晦日に廻船を動かし、禁忌の商売をしたばかりに船子を殺し、怒り狂った海坊主を剛毅に切りつけた祟りで親父は急死、そういえば、あの、高輪で闇の中から突然現れた妖怪変化の坊主こそ、海坊主だったのだ――。

うすれいく意識の中から、かろうじて「おのれっ」という声をあげて徳兵衛はついに息絶えた。

四幕目　総禅寺書院の場
同　庭内の場

お秀の方実ハ姐妃のお百　歌江
操御前　藤車
一子三之助　白岩亮
魚屋新助　大蔵
住職玄海　駒助
葛飾次郎三郎　吉次
腰元　歌松
腰元　梅一郎
腰元　小松
腰元　大西忍
腰元　谷亮一郎
諸士　二村幸雅
諸士　土肥洋史
所化　田島春男
所化　松榮忠志
浄瑠璃　竹本葵太夫
三味線　鶴澤泰二郎

この日、橋場の総禅寺では千葉家の御跡取常若君の御法事が執り行われていた。

幼君おかくれの悲しみを秘めた正室操御前、その傍らに居並ぶ側室お秀の方こそ、中川右膳のとりなしで出世をはたしたお百であった。みまごうかたなきお百の艶姿には、あの十万坪で凄味をきかしたお百の影も形もなかった。まさに姐妃のお百であった。

その時住職のはからいで静かに進むご接待をつとめた一人の稚児。その端麗な前髪の幼さに、操御前も思わずみまかりし常若君を懐旧するばかりだったが、よくみれば無残な顔の痣。あまりのむごたらしさに操御前が聞きただせば、かわりに答えた住職の、涙のこもる哀れな話、この痣子こそ、母を責め殺され、徳兵衛を殺されてお百を仇と狙う三之助であった。さすがのお百の心に大きな波紋が広がった。

動揺したお百は思わず声をかけてしまった。気が弱っていた。

「これそこな子、この菓子を取らせる程に、次へいって頂戴しや」

「いえいえあなたのお手からは、お菓子はお貰い申しませぬ」

「そりゃ又どういう訳あって」

「それでも、あなたは妾ゆえ」

一座はさっと色を失った。お百の大窓を打つ言葉だった。

本堂へ誘われたお歴々のあと、用を作って残ったお百は、ついに三之助と対座した。

まぎれもなきお高の子であった。あの徳兵衛の一粒種が、今ここに。

お百は、心の奥にすべてをかくしたまま、静かに三之助に語りかけていった――。

黙阿彌と妖怪

持田諒（演出）

黙阿弥は「姐妃のお百」として、二つの作品を書いています。慶応三年（一八六七年）市村座、「善悪両面児手柏」から、明治六年（一八七三年）村山座、「御伽草紙百物語」までの七年の間は、幕藩体制の崩壊、維新政府の揺乱、四民平等、断髪令、太陽暦への切替など目まぐるしく変っていく頃で、遣欧使節団の訪欧をばねに日本が急速に西欧化に傾斜した時でもありました。それは空から神社札が降り、全国的に「お陰参り」や「豊年踊り」が流行し、五百万人とも推計された民が狂気乱舞した幕末の異常な予兆を裏付ける結果ともいえました。

黙阿弥にとってこの七年の才月は苦衷に満ちたものでした。四世市川小團次の死によって江戸歌舞伎の大きな支えを失った落魄に、追い打ちをかけるように、幕末の今紀文と謳われた津藤が逝きます。青年期二十一才と二十七才の出遇いから「老兒」と黙阿弥を敬愛し、彼の才能の開花に陰に陽に力となった人物の終焉は悲惨でした。更に黙阿弥に鉄槌が下る程の悲劇が襲います。溺愛していた三女のおますが十三才で他界します。酒も煙草も嗜ず、狂言戯作一筋を命としてきた、謹厳実直な狂言作者が大切にしていたのは家庭でした。彼の慟哭の深さは、豊かな感受性を更に鋭くしたといえましょう。西欧海上より吹いてくる得体の知れない風は、やがて演劇改良の衣を着て、自分と狂言作者の世界に襲い来るであろうことをすでに察知したのです。

黙阿弥が見すえたのは、西欧の風そのものよりも、或る日突然に、風に取り憑かれたように変容していく人々の心、そのものでした。新しい言葉を、明日の神社札のようにあがめる反動として昨日を踏みにじっていく人々の軽妄な狂態――。この変心と行動の中核を知性と呼ぶならば知性は何をもって情念に対峙出来るといえるのか。もし、情念の外にあって情を制し、人を導くものとするならば、それはもう「妖怪」と呼ぶしかあるまい。口を固く結んだ黙阿弥は、明治を踏まえて、大正、昭和、平成を見通し、未来、繰り返されるであろう「人と妖怪」の葛藤を楽しみながら劇作の筆を重ねていったと私には思えてならないのです。

中村歌右衛門丈の一番弟子として、永く芸の修業を重ねている加賀屋歌江さんが成島和男さんと「葉月会」を興されて十三年になります。師匠の芸を旦念に習練し発表していく手習会を何度も重ねた末に、中村歌右衛門指導「東海道四谷怪談」を好評裡に納めると、お岩の演技で示した師匠ゆずりの緻密な表現力で、以後、埋れた古典を復活していきます。芸友、松本幸右衛門さんとの良き気合に磨かれて、「敷島物語」（敷島・お玉・主鈴の三役早替り）「五人女」（素走りお熊）、（傾城重の井）（重の井）、「恋闇鵜飼燎」（小松・甲作）と大役を重ね、今回の「御伽草紙百物語」でも、姐妃のお百の難役に挑みます。藤車さん、大蔵さん、権一さんに、又蔵さん、駒助さんも加わった強力な演技陣を迎えて、協力を惜しまれない政吉次師の附、葵太夫さんの義太夫、辰夫さんの立師、それにベテラン揃いのスタッフ陣が加わって職人技で支えてくれます。

いつもの事ながら、勉強の場を与えて下さった方々への感謝の念は深く、公演当日、炎暑の中を足を運んで下さるお客様への想いと共鳴して、一同更なる自己練磨へと向うことでしょう。

資料館

◎お百の物語を黙阿弥は、最初に「善悪両面児手柏」の中で書き、つぎにお百を主人公にして「御伽草紙百物語」を書いた。今回上演の「姐妃のお百」は、「善悪両面児手柏」と「御伽草紙百物語」の両方から脚色し、葉月会台本「御伽草紙百物語」とした。

それぞれに特色があり、「児手柏」の「高輪大木戸の場」をすてがたく、今回の序幕として幕を明け、あとは「御伽草紙」に依った。

「児手柏」を書いた時は慶応であり、「御伽草紙」を書いた時には明治六年になっていた。その間に明治のご一新があり、そのためか、お百がくっきりとした。丁度、下絵から本絵になったような美しい変化が部分的に見られて興味深い。

善悪両面児手柏

百	初演＝市村家橘＝後の五代目菊五郎	慶応3年3月	市村座
お	再演＝澤村源之助（四世）	明治17年7月	寿座

御伽草紙百物語

百	初演＝坂東三津五郎（六世）	明治6年5月	村山座
	再演＝澤村源之助（四世）	明治31年7月	東京座
	再演＝澤村源之助（四世）	明治33年1月	宮戸座
お	再演＝澤村源之助（四世）	明治33年6月	真砂座
	再演＝澤村源之助（四世）	大正13年7月	品川座

〔注〕東京座の時は「百物語澤辺蛍火」として再演。

◎初演〔御伽草紙百物語〕〔村山座〕〔明治6年5月〕

お百＝坂東三津五郎（六世）	新助・お熊＝坂東亀蔵	徳兵衛＝市川寿美蔵

◎再演〔御伽草紙百物語〕〔寿座〕〔明治15年7月〕

お百＝澤村清十郎（源之助）	お熊＝中村銀之助	徳兵衛＝坂東家橘

◎再演〔百物語澤邊螢火〕〔東京座〕〔明治31年7月〕

お百＝澤村源之助	新助・お熊＝市川荒次郎	徳兵衛＝市川猿之助

◎再演〔姐妃のお百〕〔真砂座〕〔明治33年6月〕

お百＝澤村源之助	新助＝嵐璃宗	徳兵衛・彦五郎＝澤村訥升

◎初演〔善悪両面児手柏〕〔市村座〕〔慶応3年3月〕

お百＝市村家橘（五代目菊五郎）	新助・お熊＝坂東亀蔵	徳兵衛＝市川左団次（初代）

妲妃のお百／ミニ百科事典

Q & A

Q—お百の、「だっき」っていうのは、妲妃伝説のことですか？

A—そうです——。世界人類を滅亡させて魔界を出現させんという祈願を持った金毛九尾の狐が、殷の紂王（ちゅうおう）の宮廷へ入って「妲妃」と称し、天竺に渡っては斑足王に淫酒をすすめる華陽夫人と化し、更に支那へ帰って周の幽王の妃・褒似と化し、いずれも国を傾けんと計ったというのです。この金毛九尾の狐がわが日本に現れたと伝わるのが、「玉藻前」の話です。

Q—見ましたわ。

A—日本では、鳥羽天皇の御代に才色無双の美女が宮中に現れた。総身から光を放ってあたりを照らすので「玉藻前」と名づけて天皇の御感ななめならず、遂に妃に召された。すると天皇御不例、御悩日々に重らせたまうので陰陽博士安倍泰親が占い奉れば、玉藻前こそ、今言った、金毛九尾の狐とわかったのです。

Q—それで？

A—安倍泰親が呪文を唱え三度蟇目の法を行えば、玉藻前は忽ち妖狐の正体を現して下野の那須野が原に飛び去った。そこで勅命を受けた三浦之介義明、上総之介廣常が狩りを催して首尾よく射止めたが、その妖狐の一念が凝って殺生石となり、鳥獣人類之に触れるものは皆倒れた、と伝えられています。

Q—凄まじいわ。

A—そこで後深草天皇の御代に玄翁和尚が勅を奉じて那須野へ下向し、法力をもって殺生石を真っ二つに破砕してようやく悪霊全く退散したといわれています。

Q　謡曲の「殺生石」ですね。

A—これを操り浄瑠璃に脚色したのが、人形浄瑠璃の「玉藻前曦袂」です。

Q—歌舞伎の脚色で有名なのが鶴屋南北の「玉藻前尾花錦絵」でしょう。

A—そして、黙阿弥の「妲妃のお百」。

Q—やはり、狐なんですか？

A　いいえ、黙阿弥は独自の世界を開きました。江戸時代も後期です。新しい商業の時代が到来し、公家・貴族は無力化しています。主人公も大阪・の廻船問屋の亭主、お百もただの女中奉公の女です。

Q—でも妲妃のお百なんでしょう？

A　三幕目の「砂村殺の場」で、啖呵をきるお百が言っています。「三国渡ったこのお百が、亭主殺しの殺生石、これから千葉のお妾で、飛ぶ鳥落すいきおいに、成って悪事を那須野が原、草場のかげから徳兵衛さん、私の出世を見物おしよ」

Q—いよォ、加賀屋ッ。

A—まぜっかえしちゃあ、いけません。ええと、どこまでいきましたっけ。

Q—初演を教えて下さい。

A—明治六年五月・村山座で「御伽草紙」が初演されました。お百を演じたのが、六世にあたる坂東三津五郎です。吉弥から三津五郎を襲名して、たいへんな闊達ぶりを発揮した若手だったと伝わっています。

Q—再演は？

A—これが「妲妃のお百」を有名にした四世源之助です。たいへんお百を気に入りまして明治十五年、三十一年、三十六年と続け、大正十三年にも復活しました。

Q—「澤村源之助」という綺麗な本で読みました。

A—勉強家ですね。詳しくは年表で見て貰うとして、纏めますとお百を演じた人は、五代目菊五郎、坂東三津五郎、澤村源之助ということになります。

Q—そして、加賀屋歌江さん。

A　そうですね。特に、源之助さんは、「児手柏」の大木戸の場と「御伽草紙」の総禅寺の場が気に入っていて、大好きだと書いています。

Q—えっ、ちょっと待って下さい。「児手柏」って、何ですか。

A　あっそうか、まだお話してなかったね。黙阿弥は最初に「善悪両面児手柏」という本を書いていまして（このてかしわ）と読みます。和尚次郎とのからみで妲妃のお百を書いたのですが、後にお百を独立させて、今度の「御伽草紙」を書きました。「高輪大木戸の場」というのは最初の「児手柏」の方に出ています。そして「総禅寺の場」が「御伽草紙」です。当時の源之助さんは、一遍に両方やるという訳にはいきませんでした。しかし、今回は「葉月会」ということで、序幕に大木戸、四幕目に総禅寺を趣向しまして、その両方のお百を一度に演じるは歌江さんが初めてです。

Q—源之助さん、うらやましがるでしょうね。

A—高輪の大木戸から芝居が始まるのは、お百も徳兵衛も、大阪の失敗を江戸の新天地で取り返すために東下してきたのです。ところが、高輪にも海坊主が現れます。ここでお百はつくづく徳兵衛を見切る気持ちになるのです。

Q—海坊主が江戸まで追っ掛けてきた？

A—そして、徳兵衛を見捨て、重兵衛に乗り換えても、まだそれだけで満足できない。芸者に出て知り合った中川右膳と通じ、千葉家乗っ取りを策謀する。やがて、成功して飛ぶ鳥を落とす勢いに出世していきますが、禅宗のお寺で正体が現れるのは、殺生石を破砕した禅の世界をきかせています。

Q　伝統にしっかりと乗ってますね。

A—世界を町人の世界に借りていても、根底に故事来歴の伝説を生かしている作劇のうまさは、正に「総禅寺の場」に現れています。特に四幕目が、今度のみものであるのは、ここのところです。

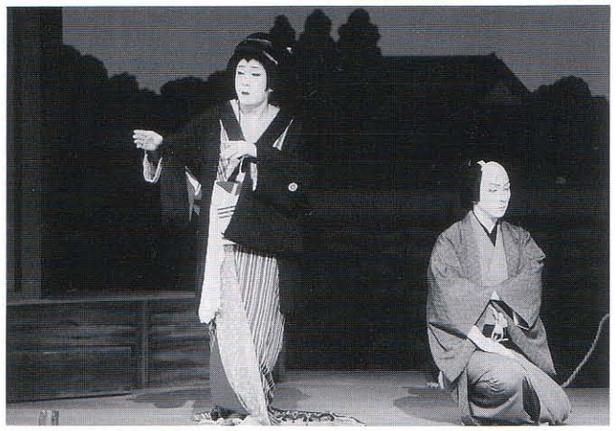
Q—どうもいろいろ有難うございました。

A—ご期待下さい。

平成５年８月18日

戀闇鵜飼燎

写真集



芸者小松＝歌　江
穂積文三＝勘之丞（右）

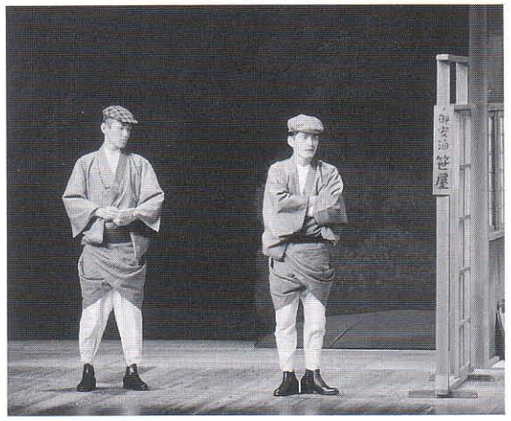
戀

の道行か、一人心中か。
流麗な清元浄瑠璃『嘘と誠は二瀬の水色・隅田川月雨雲』が流れてくると文三・小松の出である。文三＝勘之丞、小松＝歌江のご両人。

〈宵の間に降りし小雨もいつか止み、そよ吹く東風に川添いの、柳の雫はらはらと、落ちて行方も白露や、
文三　小松。
小松　文三さん。
ト二人見合う。
文三　どう考え直しても、死ぬより外に思案はない。
小松　私も死ぬ気でござんす。
ト小松袖を顔へあてて泣く。

「戀闇鵜飼燎」の幕あきである。
上演後、小松は本気で死ぬ気だったのかどうかが話題になった。文三に続き、飛び込もうとした時、水鳥が飛び立ち、羽音に驚いた小松は思わず尻餅をついた。
その瞬間、小松はハッとした。正気に戻った。あたりを見まわした。あたしは何をしているんだろう。そう、文三さんは、と川べりに立った小松は、今のいままでの小松ではなかった。

（右）探索丹作＝光　紀
同　鳥蔵＝紀　義



芸者小松＝歌　江
月の輪熊蔵＝大　蔵（右）

文字で書かれた台本から芸者小松が舞台に創出される迄の過程は謎である。その世界の神秘は、或いは役者のみが知る「秘境」かもしれない。何人も伺い知ることの出来ない世界である。人は、或いは「孵化」に似ていると言い、或いは「受胎」から「出産」に譬える人もいる。嘘か、誠か。作者は浄瑠璃の「詞」にたくしているばかりである。
ここが、芝居の面白いところである。
さて、この心中をじっと見ていた悪党がいた。
月の輪熊蔵＝大蔵である。

熊蔵　知れたことだ。のぞき見していたはじめから、度胸にまさるその顔のいいのに惚れてお前の身体、自由にしたいばっかりだ。
小松　おつなことをお言いだが、私やお前のその為に、自由になる気はありやしないよ。
熊蔵　なに、その気はねえと。
ト熊蔵きっとなる。

闇

にうごめく人・人の暗躍は、ここ「笹屋」からはじまった。賢三郎の行方を追って、探索方の手が伸びてきた。賢三郎は一仕事したあと、隅田川を渡って甲州へ逃げ、「安泊笹屋屋」の亭主になりすましていたが—。
小松も熊蔵をたぶらかして甲州へ、賢三郎とよりを戻して身を隠していた。
——「笹屋」に不審を抱く探偵。奥からかいま見た賢三郎はついに逃避行を決意する。

昨夏の舞台から

戀闇鵜飼燎

写真集〔その二〕

鵜遣い甲作＝歌　江

小　松＝歌　江

穂積文三＝勘之丞（左）
船木賢三郎＝幸右衛門（右）

文三女房お崎＝歌女之丞（左）
小　松　＝歌　江

○――文三の女房お崎は、亭主の浮気は女房の不始末だと姑から咎められて、実家の甲州へと旅に立つ。宿をもとめて立ち寄った「笹屋」で奇しくも小松の世話をうけるが、一子徳太郎のつけていた迷子札から小松は、目の前の盲のお崎こそ文三の内儀であることを知り愕然とする。闇の世界に閉じ込められたままのお崎は何も知らずに笹屋をあとにする。

○――一方、身を投げたものの一命はとりとめた文三は、逃げた小松を追ってこれも一路甲州へ。逃げた小松が甲州の生家へ立ち寄ることは必至と考えた挙げ句の追跡だった。

運命の糸はまるで「笹屋」へ吸い寄せるかのようだ。一夜の宿と草鞋を脱いだ文三に煙草の火をかした賢三郎の目と目が合った。

文三　や、お前は。（ト賢三郎、頷き）
賢三　おゝ、下谷の穂積文三さんか。
文三　おゝ、お崎が兄の太之助さん。

賢三郎は、今でこそ関東を股にかけて荒稼ぎをする大泥棒だが、堅気の時分は太之助を名乗っていた。その妹のお崎と文三は結ばれていたのだった。

○――「笹屋」に交錯する闇の人々に、熊蔵が加わってきた。小松と賢三郎の弱みにつけ込むだけの種をこの悪党は十分に利用した。苦境に立つ二人。しかし、賢三郎はゆすられたふりをして五十両を渡し、熊蔵殺しを決意した。

小松　もし、それぢゃあきっと待っててておくれよ。
賢三　待っていねえでどうするものか。
小松　きっとだよ。（ト縋りつくを木の頭、）
トこの模様雨の音、合方、時の鐘にて、　幕

○――しかし、小松は二度と賢三郎に逢うことはなかった。追いすがる文三からうまく逃れてほっとしたのも束の間、闇の奥に待っていたのは狠の群れであった。絶叫して助けを求める小松の悲鳴はむなしく笹子峠の闇に消えていった。

鵜飼燎

照らしだされた女の生首は、たった一人の妹の千代の首であった。

甲作　や、こりゃあ己に似ている筈だ。十年先に家出をした、おいらの實の妹のお千代の首だ。

無残な結末に、明治の芝居界も賛否に揺れた、と記録にある。黙阿弥の「首もの」の中でも珍しい一ト幕。夢であってほしい、という小松の願いも空しく、もう一息という峠道で小松の女の一生はついえた。

名著再読

『明治演劇史』（伊原敏郎著）

＝近代かぶき風雲録＝

「明治の維新で、日本の政治や社会にはあれほどの大変動が起こったけれども、演劇は直ちにその影響を受けなかった。それらの変動や、変動の前に襲った不安のために、劇場が暫く興行を休んだり、また興行しても見物が少ないというような事はあったが、しかし幕府時代からの惰性で在来のまま動いていた。」

名高い『明治演劇史』の冒頭で、著者の伊原敏郎氏はこう書いている。

歌舞伎にとって「明治」とは、こんな夜明けであった。二百五十年あまりの長い年月に親しまれてきた「芝居」が急に変わるわけもなかった。

その年慶応四年、「鳥羽・伏見の戦い」が正月三日には戦端を開いた。

戦火は江戸から遠かったが、「遠慮」という事で江戸の各座は正月興行は休んだ。

しかし戦火がおさまると、二月には守田座も、中村座も芝居を明けた。

四月には、守田座が、五月には市村座が明けた。

この五月には上野で彰義隊の戦争があったのに、暫くは中断したが、「一日休んでは二日明け、二日演じては三日休んだ、と意外の現象である。」と記述されている。

動乱の余波をうけて不況ではあったが、出方（でかた）一統の難儀にもなるので、相談を続けながらともかく芝居を明けていた様子が書かれている。

こうして八月二十五日に市村座の八月興行が初日を出し、返り初日を迎える九月の二十三日に、芝居界を驚嘆させた事件が起きた。

太夫元の河原崎権之助が凶刃に倒れたのである。正確には、九月八日・「明治」と改元されたばかりの二十三日の夜中であった。

その月、市村座は「梅照葉錦伊達織」「芦屋道満大内鑑」をだし菊五郎の仁木・八汐、田之助の政岡・紫、権十郎の男之助・勝元・保名であった。

この権十郎が、後の九代目團十郎となる河原崎権十郎で、養父・権之助の遭難の夜、今戸の自宅の二階にいて難を逃れた。

この時期、物情騒然たる新・東京の治安は悪く、夜盗は横行していた。権之助の自宅は今戸にあり、五六人の浪人風が押し入った。

初日だから現金を狙われた。十歳まで物色した一味が引き揚げようとした時、

――――ご飯でも上がっていきなせえ。

と権之助がいうと、一人が振り返りざまにひと太刀浴びせた。

覆面の下を見透かされ、面が割れたと勘違いしたらしい。

この太刀すじが不運だった。やがて母屋から駆けつけた権十郎の胸に抱かれた時は、かなりの出血だったという。手当ての甲斐もなく、権之助は五十二歳の人生を閉じた。

働き盛りの突然の最後だった。権十郎、三十歳の夏である。

＝稽古漬け＝

亡くなった河原崎権之助は「神主」とも「ふと鬚」とも言われた。ふと鬚はやぼの代表で堅物の、素人くさい人柄を言ったもの、二十まで吉原を知らなかった評判が神主とからかわれた。しかし一方では、棄捐令（きえん令・それまでの借財は返済無用の令）の時も権之助は決して踏み倒さずに借財を新証書に書き換えた。義理を重んじ、堅実につとめ、一方で、野心の実現に邁進するというタイプであった。

時の千両役者の七代目團十郎から一子を預かったのは、十九歳の独身時代のことで、生まれたばかりの男の子を貰った。一緒に暮らしていた権之助の母が面倒をみた。夫婦に子供がなくて貰った、という平凡な事ではなかった。独身なのに養子をとったのである。

子供に長十郎と名をつけた。七代目團十郎が、権之助ならと言って見込んだのだから、たいへんな信用であったに違いない。一方、権之助にしてみれば、今をときめく成田屋から男の子を貰い、一生懸命大きくして立派な役者にして見せようという意地があった。

それは長十郎につけた稽古の厳しさをみればわかる。その厳しさは、権之助の母、つまり九代目にとっては養祖母のお常が稽古好きだったのと、八歳になってから河原崎家へ嫁にきた権之助の妻、つまり九代目の養母お光がまた厳格な人という二重の環境が重なった厳しさだった。お光は、竜ヶ崎の呉服屋の娘で行儀見習いのため藤堂家へ仕えていたが、縁あって権之助の許へ嫁いできた。

『――朝早くバアヤがおぶって、長唄、踊り、三味線や、琴や、お茶の稽古にいきます。帰って、内で漢学の先生に教わる。また外で習った分をさらわせられる。外へは遊びに出さないので、手水場（ちょうずば）へいってそこで休むという位だったそうです。』

『右の手で扇を投げて、左の手で受けるのを、明るい所で出来ただけでは役に立たないと、暗い座敷でそれを練習さした。実父の七世團十郎がそういう厳しい練習を見て、河原崎では貰った子を責め殺しはせぬかと心配して、その意味をもらすと、「お前さんの所では子供を砂糖樽へつけておくからいけない。ここでは砂糖樽にも唐辛子が入れてある。」と、お常が言ったという。

長十郎自身は十四歳まで自分が養子だということを知らなかったが、七世團十郎が時々稽古の厳しいのを見て、そんなに厳しくなくてもよい、と言ってくれるので、いい小父さんだと子供心に思っていたとは、本人が晩年に自分の娘實子に語った所である。

こうして稽古の日々を送るうち、十六歳の時、安政元年の兄八代目團十郎の死を聞くことになる。この時は実父の七代目は健在であり、運命の転換は潜在していた。九代目にとっての大きな転換点は、前述の養父の急逝であった。急ぎ権之助を襲名して第一の仕事は河原崎座の再興であり、市川家への復帰が優を待っていた。次回へ送ります。

（編集部）

長唄	鳥羽屋里長	附師	稀音家政吉次
	鳥羽屋文五郎		
	杵屋弥七郎	長唄指導	鳥羽屋里長
	鳥羽屋里一郎		
	○		
	芳村伊千四郎	鳴物指導	望月太左之助
	柏庄六		
三味線	杵屋源次郎	浄瑠璃	竹本葵太夫
	杵屋長之介	三味線	鶴澤泰二郎
	松島庄六朗		
	杵屋榮七郎	作曲	竹本葵太夫
鳴物	望月太左之助	狂言作者	竹柴正二
	望月太左久		
	仙波孝記	つけ打ち	古賀学
	仙波和典		
	望月太左禄	頭取	穐野吉昭
	高垣哲郎		
	廣澤忠行	立師	尾上辰夫
	○		
	川島佑介	子役指導	音羽菊七
	○		
	望月太喜一郎	振付指導	藤間伊佐舞
	鳳声晴之		

国立劇場美術 碇山喬康
照明 冨田修好
音響 石井眞
舞台監督 切替良之
パシフィックアートセンター
日本演劇衣裳㈱
東京演劇かつら㈱
東京鴨治床山㈱
藤浪小道具
台本 葉月会文芸部
制作 葉月会

おわび

当初、桑名屋徳兵衛に出演予定の片岡松之助は病気の為休演いたしました。代わりまして、

桑名屋徳兵衛＝山崎権一
総禅寺住職＝中村駒助

が勤めます。

ご案内の変更をおわび申し上げます。

葉月会

編集だより

○炎暑。ことしほどこの言葉がうらめしい夏は初めてでした。稽古に通う八月の晴天をいつも祈りますが、暑さは少しは勘弁してほしい——。水不足で悩む地方の方々には申しわけないが、八月の晴天を祈りつつ、校了。

○勉強会には厳しい「環境」がますますハードルを高めてきました。夏は芝居がお休みだから、と始まった勉強会です。

汗をかくためにも八月でした。しかし本公演・巡業のスケールは毎年ひろがり発表会も八月に集中です。来年は、戦後五十年。葉月会十四年。どうぞ絶大なるご支援を今からお願い申し上げます。

（成島）

発行 平成6年8月17日
〒102 千代田区隼町4・1 国立劇場
社団法人 伝統歌舞伎保存会
葉月会
編集事務 成島和男
☎(3265)7411番
印刷所 ハイビジネス